

初年兵の思い出

宮城県 高橋 康 治

昭和十七（一九四二）年十二月一日、勇躍征途に着き、新発田歩兵第三十連隊に入隊しました。その晩に古年兵に「オイコラ」と声を掛けられましたが、誰のことやら分からず、ウロウロしていたら「お前だ」と来たので「ハイ」と返事をしますと、その痰壺を洗って来いと命令です。痰壺など見たこともないのですが何とか命令に従うことが出来ホッとしたのが、これが軍隊に入つての第一印象でした。その後戦地に行つても「痰壺殿」とは会う機会がありませんでした。

昭和十八年の新年は、北支の淳県の北東の、万里の長城が見える第一線の大當鎮に駐屯する第一中隊でした。この新年は、我々の歓迎と入隊式が一緒で、派手に振る舞つて頂きましたが、お客待遇も三日過ぎれば初年兵の身分となり、班内では

りました。

また中隊の前を流れる川を挟んで演習場があり、水が涸れた時は自由に渡れたのでした。そして「この川の水が涸れるとも、二度とこのようなことは致しません」と声高らかに誓われました。一期検閲の演習の合間には二百メートル位前方にある立木を回つて来いといわれ、二十番以下はもう一回と宣言されます。皆罰則に会わないように一緒に懸命で、我慢と意地を鍛えられたものでした。やがて一期検閲も終わり、歩兵砲班八人は中隊長に「我々八人は、歩兵砲修業に大隊本部に行つて参ります」と申告し出発しました。

各中隊より集まった二十三人で編成された混成の修業班なので競り合いも激しい毎日でした。ところが入隊前に踵を手術し治癒していたのですが、厳しい毎日の教練が続いたためか、傷口が破れて血が止まらない。教育助手に話したら、これではいけないと医務室で手当をしたが、我慢もいところ、化膿したら大変だと直ぐ入院することにな

隣の班で気合を入れる音がすると、我が班に飛火する始末でした。

ある晩、点呼になった時、私が銃の手入れを怠つてることが発覚し「どうして手入れが出来なかったのか」と問われたので正直に答えるしかなく「班長室の掃除に行つて出来ませんでした」と答えたら「お前達は共同精神に欠けている。一人分位やる気があれば出来るだろう」と、私はみんなに平謝りしてその場は納得してもらいました。そのほか事あるごとに体罰が繰り返され、鶯の谷渡りと称して机の下を腹這いになり、鶯の鳴き声を真似して通る仕業や、机の間を空けて両手で体を支え、足で自転車を踏む仕業、「それ坂道だぞ、早く漕がないと後戻りするぞ」と気合を掛けられたり、また申告と称して各班を回らされたり、そのうち城門衛兵に着いた時等は、古年兵を「交代です」と起すと足で蹴られ、己む無く三交替が二交替となったことなどがあります。これも軍隊が創立されて以来の申し送りと恨まず務めた事もあ

りました。

教育も中盤となり、大事な時期と思つたがどうにもならないと悩みの毎日でした。教育助手が中隊から付いて来ていたので特別の扱いを受けました。演習が終わると、毎日毎日勉強する個所を教えて帰られる姿に手を合わせ感謝の極みでした。ある時「お前のいない演習には意欲が湧かない」と漏された一言に感泣し、何んとしてもこのご恩に報いなければと、毎日病床にあつて猛勉強でした。

間もなく退院の命令が出たので、今度は砲に付属する眼鏡の夜間操作の勉強をしなければみんなに追い付けないと、不寝番の同年兵の黙認を得て、砲舎より眼鏡を無断拝借し、目を瞑つたまま手で操作することも目を追うごとに上達し、寸分の狂いもないまでに出来るようになりました。砲の訓練の来る日が待ち遠しくなつた頃、演習の見学が許されたので小躍して喜びました。

ある日のこと百二十位ある名称の質問を同年兵

が受けたが答えが不十分でした。そうしたら私に質問が回って来ましたがさかさず次々と答えますと、「お前ら全員入院せよ」と班長殿に怒鳴られた時は、私は何もせずに勉強一筋に来たのだから当り前と思いましたが黙っていました。私だけは教育助手の恩に報いることが出来たと心が和みました。

演習にも一緒に駆け回ることができるようになり、眼鏡の目隠し操作も上手に出来ました。私は教育助手と枕を並べているので何かとお世話もしました。床に入ると、毎夜のように、教育助手も腹ペコを経験されているせいか、暖かい饅頭の差し入れに心暖まり、目を潤ませていました。私もこのように人を思いやる古年兵になることを心に誓いました。

想い出のあった教育隊に別れを告げ中隊に帰ったところ、大恩人の教育助手は内地の広島島の暁部隊の高速舟艇部隊に転属されたことを知り愕然としました。

私の人生はどうなっていたらかと思いましたが。

無事作戦より帰隊したら、入隊当時の同郷出身の内務班長の指揮下で、次の作戦に中隊の歩兵として、出動した時は、既に敵は逃走しておらず、宿営地では何頭もの豚を徴発し、吊るしていた。

ある日のこと炊事に、飯上げに行ったら炊事係の肩章に苔が生えていると自慢していた古年兵に、持って行った飯盒で右頬を殴打され、飯盒をもう一度洗って来いと追い返されました。

帰る途中、班長殿に会ったら「耳をどうした」と問われたが咄嗟に、炊事場の戸に当りましたと嘘をつき帰って見たら耳朶が切れていました。今でも傷が残っておりません。あのような古年兵には絶対なりたくないと思ってきました。

昭和二十二年六月、無事二度と踏めない覚悟であった。内地に帰還出来、戦死された方々のことを思うとき感慨が胸に迫りくるものがありました。途中無事帰宅し、戦友から聞いたら教育助手が戦

程なく「十八春大行作戦参加」の命令が下され、しかも経験のない連隊砲要員として大隊本部に集結となり、作戦に参加したのですが、峻険な山岳地帯を夜を日についての強行軍に疲れ果てている時、大休止の命令に皆一斉にまどろみはじめました。

私もうつらうつらしたら夢の中に父の実家の祖母のこやかな笑顔に直面し、いい気分になっていました。ふと目を明けたら、暗闇の中でも右手の前進方向に誰も見当たらないのに気付き「オイ行くぞ」と左側の戦友に声を掛け急ぎ歩き出しました。しかし行けども追い付かず、これは大変なことになったと錯乱状態になりました。そこでは二又道に差し掛かり、右か左かに迷ったのですが、別れたばかりの祖母のお力で、友軍の方向に導いて欲しいと祈りながら、右を選んで進んで行ったら運よく追いつき胸を撫で下しました。これも北支まで夢のなかで会いに来てくれた祖母の魔力に感謝しました。もしあれが左に行っていたら、今

死されたとのこと、早速自宅に参上して戦地でお世話になったことを霊前に報告、ご冥福をお祈りして辞してきました。

また北支まで会いに夢の中で尋ねてくれた祖母のあの日が命日だと聞かされ、神も仏もないなどと言われておりますが、私はあることを信じて、以来生活し今日に至っております。

【解説】

八月二十日、中隊長から日本の敗戦を知らされ、敗けていないのに何故終戦かと怒りがこみ上げてきた。無念の想いのなか、一方では毎日敵兵の監視の下に兵舎の整理清掃などを行い、復員のための集結地である大原近郊の楡次まで鉄道線路の上を野宿をしながら、雨の中の強行軍であったという。この強行軍では途中顎を出す者が続出、手榴弾をくれと言う者も出るなど生地獄の様子を報告している。その中を戦友と助け合いつつ楡次に到着、十月になると奥地からの引揚列車の警備に狩

り出され、武装解除で渡した武器が再び貸与されたという。

昭和二十一年六月、ようやく故国に帰るため天津に向け出発し、大沽港からアメリカの上陸用舟艇に乗せられ山口県仙崎港に上陸、二度と踏まない覚悟だった本土に帰った。六月十九日伍長に任官、検疫を受け感慨無量なるものがあつた、と三年間の北支での体験を語っている。